■研究ノート

スポーツ組織活動参与とナショナリズムの生成過程

ーイギリス統治下のアイルランドを例にー

海老島 均¹⁾

抄 録

本論文では、アイルランドの独立運動において重要な役割を果たしたGAA (Gaelic Athletic Association) が様々な揺らぎを経験しつつも、最終的にナショナリズムの波に合流していく過程を、グラスルーツ・レベルのメンバーのメンタリティに焦点を当てて検証した。

GAAの各クラブは、アイルランドの近代史を語る上で重要なカトリシズム、さらにそのパリッシュ(小教区)をベースに設立された。また、土地解放運動を展開したINL (Irish National League) もGAAクラブ設立で重要な役割を演じた。カトリシズムと土地解放を中心とした自治権獲得運動、この二つのイデオロギーがGAA設立の大きなバックグラウンドであったといえる。

交通網及びマスメディアが未発達の場合は、聖職者を中心とするパリッシュが人々の生存の基盤であり、また支配者階級のイギリス人地主に対抗するためパリッシュ内の凝集性は極めて高いものとなっていた。「我がパリッシュ」という「われわれ」アイデンティティとパリッシュ住民の自己アイデンティティはほぼ同一であり、いわば極めて単層化に近い構成のメンタリティがそこには存在した。このメンタリティが、さまざまな外界との接点を通して「われわれ=われバランス」に変化を来した。GAA等の活動を通じたパリッシュ間、カウンティ間の交流、さらにパリッシュあるいはカウンティを横断したナショナリスト団体との繋がりによって、彼らのメンタリティの中に存在していたナショナリストとしての「層」が強固なものとなった。特にGAAの理念の中心となっていたBan (外国ゲーム禁止令等の制限ルール)により、イギリスの文化的侵略に対する認識が高まった。このことで「われわれ=Irishness」のアイデンティティが先鋭化し、占領者、占領文化に対する強固な抵抗へと具現化していった。

分析の資料としてはGAAクラブ史に焦点を当て、今まであまり分析対象とされなかったグラスルーツ・レベルでの変化を検証し、独立運動へと向かった伝統スポーツの継承者たちの社会心理を浮き彫りにした。

キーワード：ナショナリズム、カトリシズム、GAA、われわれ=われバランス

Involvement in Sport Activities and the Growth of Nationalistic Sentiment:

A Case Study of Ireland under the British Regime

EBISHIMA, Hitoshi ¹⁾

Abstract

This paper focuses on the process by which the personality layer of nationalist was strengthened through the involvement in the traditional sport (GAA) in Ireland.

The general understanding about Irish nationalism generated through the GAA activities is that the IRB took control from the beginning and the nationalist feeling was reproduced through the GAA activities. The different viewpoint about this is provided in this thesis.

The parish-based club system played a main role in the creation of the cohesiveness among the GAA members. Irish National League was another key player for this role. Catholicism and introductory campaign for home rule were two ideological backgrounds for the establishment of the GAA.

Subsequently the networking between parishes or counties was enhanced through the GAA activities along with the other nationalist movements. The web of interdependency was extended in this process and a rather isolated unit of a parish became more integrated to the nation-wide nationalist movement.

Through this process, the parishioner's layer of nationalist became more dominant than the other layers in their mentality. Finally several nationalist movements became inter-linked with each other and amplified its sentiment towards Independence.

Local club histories were used to illustrate the grass-roots sentiments rather than the decision of the Central Council of the GAA. Consolidated 'single-layered' sentiment, which was facilitated by the Ban, against political and cultural colonization by Britain was a key factor to explain the generation of Irish nationalism within the GAA members.

Key words: Nationalism, Catholicism, GAA, We-I Balance

1) Department of Sport Study, Biwako Seikei Sport College

はじめに

GAA (Gaelic Athletic Association) とは、アイルランドの伝統スポーツを振興するスポーツ団体である。20世紀初頭のアイルランド独立運動で中心的役割を果たしたことから、GAAとナショナリズムに関する研究が多数存在するが^{註1)}、大半がナショナリスト運動に加担する政治団体にGAAが利用されたという立場をとる。ナショナリストが象徴的な伝統スポーツを通して国民のIrishnessを熟成させ、ナショナリストを再生産する構造を作り上げていたという論調である。確かに初期にGAAの中央委員会を乗っ取ろうとしたナショナリスト団体IRB (Irish Republican Brotherhood)^{註2)}にはそのような意図があった。現在までの先行研究はこの中央委員会の議事録を中心に分析し、本部組織の意志決定に重点を置いたものであった。しかし、政治には関わりなくGAAの人気を支えたグラスルーツ・レベルの活動に注目した研究はあまり存在しない。本研究では、主にGAAのクラブ史を文献資料として用い、グラスルーツ・レベルで参加したメンバーのメンタリティに焦点を当てながら、GAAがアイルランドのナショナリスト運動の波に呼応していく過程に関して検証していく。

1. GAA創設の社会的背景

1884年に創設されたGAAはその名が示すように、最初は陸上競技 (Athletics) に焦点が当てられていた。団体創設の役割を担ったキューザック (Cusack) は、イギリス占領下のダブリンでの陸上競技運営に不満を持ち、アイルランド人労働者階級に開かれた団体の設立に乗り出した。当時はアイルランドの伝統スポーツであるハーリングとゲーリック・フットボールがイギリス人の持ち込んだサッカーやラグビーなどに押されて瀕死の状態になっていた。このため伝統ゲームの復興も重要な目的となった。

GAAが誕生したアイルランドの19世紀後半の社会情勢について少し論じておこう。キーと

なるのはカトリック教会と土地解放問題に端を発する自治権獲得 (home rule) 運動である。イギリスによる統治にも関わらず、19世紀初頭にはアイルランドでカトリック教会の権力が増大していった。その背景として、アイルランド人の精神的バックボーンであったカトリックを、イギリスが教会弾圧によって排除しようとしたことがある。このことでアイルランド人を聖職者から切り離すどころか、統治国家に対する反発をより強める結果となり、教会を中心とした団結が強化された[Inglis, 1998: 117]。人々の生活をコントロールしたり、プロテスタントの教育システムを導入したりといった、イギリス政府による文明化の試みは失敗に終わった。

西洋の文明化やマナーは、身体的コントロールが自己規律 (self-discipline) に基づいて内面化することより発展した[Elias, 1982: 247-250]。アイルランドの状況を考えると、修道士が悔罪の過程において自らの身体を監視するのと同様な形で自己規律が獲得されていたといえる。イングリスはイギリス政府ではなくカトリックの聖職者が、エージェントとして文明化を促進させた要因を分析した。彼は、1) 神父という人間的存在自体が自分を律することのできる文明化されたカトリック信者である、2) 誕生、結婚、葬儀などを司ることで自らが規律となり、さらに教区民宅への訪問や告解を通して社会生活のあらゆる面を監督した、3) 教会だけでなく現代社会では学校、病院、家庭でカトリックの教義と実践の本質が広く普及した、ことを挙げた[Inglis, 1998: 140]。聖職者はアイルランドの地方では絶対的な存在であり、庶民の精神的支柱でもあった。このため、神父を中心としたパリッシュ (小教区) というコミュニティが強い凝集力を有していたのだ。

もう一つのキーとなったのが、土地解放運動を基盤とする自治権獲得運動である。まずは土地同盟 (Land League) が結成されイギリス人の地主階級に対する抵抗が強まったが、当局によって違法とみなされ弾圧された。その後より合法的な組織としてINL (Irish National League) が結成され、政府、地主階級とのせめぎ合いが続

いた。

GAAの創設には、カトリシズムと自治権獲得という2つのイデオロギー的基盤が存在する。これらは複雑に絡み合っており、市民の精神構造の中でも明白に分離しがたい層となっており部分的に重複していた。例えばINLの支部がパリッシュをベースとしていることもあった。次項では、2つのイデオロギー的基盤とGAAクラブ創設の結びつきを考察する。

2. クラブ創設とその後の変遷

1) クラブ創設(1884年前後)

① INL 主導型

GAAのクラブを創設する際には、多くの場合INLが大きな役割を果たした。その中からいくつかのクラブの事例を挙げてみる。まず、クローハンという地域でのGAAクラブ創設を見てみよう。

「INLの1889年3月2日の定例会議で、クローハンでGAAクラブを創設することが決定された。1889年3月9日にバリナミーンのウィリアム・オブライエンズとノッカラッシュのラウンド・タワーズによるエキシビション・マッチが予定されている。クローハンの若いスポーツマン全員に参加を呼びかけることになった」^{注3)}。これは、INLのネットワークを通じてGAAが普及していった事実の一例である。

INLメンバーでないとGAAに参加できないほど、INLによる統制が厳しいクラブもあった。ロングフォードでは、「1890年の年次総会でロングフォードGAAクラブは実質上INLと合併した。というのは、クラブ員がINLのメンバーシップを持っていないければ、そのクラブはカウンティ(州の最大行政区)選手権に出場することはできないという決議が通ったからである」^{注4)}という議決が記録されている。このようにGAAがINLの傘下としての特色が強かった事例も見受けられる。

② 聖職者主導型

一方、数としては少ないものの、聖職者が主導

型でクラブが創設されたこともあった。一部のINL主導型クラブでは、パリッシュの中心人物であった神父などの聖職者がクラブの中核メンバーとして名を連ねていたが、多分に名誉職的であった。しかも、より積極的な形での参加が見受けられることもあった。ネースのGAA設立会でのウォルッシュ神父のスピーチは以下の通りだ。

「…この種のこと(GAA設立)がこの町では非常に望まれていたのである。メンバーの選択に当たっては非常に慎重でなければならない。なぜならば、誰でも受け入れることによって、GAAに害となる人物も入ってくる可能性があるからである。これは唯一の真のナショナリスト団体であり、非ナショナリストに入ってもらいたくないのである」(括弧内は筆者の説明)^{注5)}。クラブ会長に選任されたウォルッシュ神父は信頼に値する神父だという評判を得たが、同時に真のナショナリストだった[McNarnnuns, 1987: 3]。つまり、ナショナリスト運動の一環としてクラブを設立したのである。

バリナメアーのクラブ史の記録では、「…バリナメアーにハーリングが紹介されたのは1880年代後半であった。タラモアを司っていた神父により紹介されたのだが、彼はこのパリッシュにとっても興味を持っていた」^{注6)}という。この神父は競技を広めるだけでなく、暴力的な若者たちのエネルギーをハーリングという競技に向けさせようとした^{注7)}。当時はパリッシュ間の抗争によって死者が出ることもあった。この場合は、GAAの競技に教育的価値を求め、地域のモラル作りのためにクラブを設立したのである。

また、GAAクラブは「1パリッシュに1クラブ」という方針(パリッシュ・ルール)を打ち出した。19世紀にはパリッシュが重要な社会的ユニットであり、マスメディアや交通手段の未発達から人々の行動範囲や情報収集網はパリッシュ内に限定されていた。パリッシュ・ルールがそれぞれパリッシュのアイデンティティを育てたのだが、パリッシュ間のライバル意識を醸成する役割もあった[Ó Corcora, 1987: 43]。とはいっても友好的ライバル意識であったため、ゲーム

によるパリッシュ間の交流によって、以前は存在していなかったパリッシュ間のネットワークが作られたと考えられる。

2) キューザック解任とIRBの影響力強化 (1886-1891年)

1886年のGAA総会においてGAA創設の中心メンバーだったキューザックは事務局長の職を追われることになった。表面的には事務上の不手際などの理由が取りざたされたが、事実を証明するための歴史的資料は乏しい。「キューザック解任はIRBによるGAA乗っ取りの前奏曲であった」[Mandle, 1987: 31]という分析からも判るように、これを境にIRBの影響力が高まった。解任の2ヶ月後、IRBの最高機関の長官でもあったオレアリー (O'Leary) が4代目パトロンに選任された。さらに1886年の定例会議で選任された4人の副会長全員がIRBのメンバーだった^{注8)}。同会議では、各カウンティに委員会を設け、代表者を中央委員会に送り出すという新規則の導入が決まった^{注9)}。

この決議は地方に対する中央委員会の統制を高めようとするものだった。やがて、IRBに乗取られたGAA中央委員会とINLや聖職者にリードされる地方GAAクラブやその代表となるカウンティ・レベルとの溝は深まっていった。新規定に対する反応も、1886年中に26カウンティ中6委員会が設立されただけだった[O'Sullivan, 1916: 40]。

翌年の定例会ではIRB色がより強くなった。RIC (Royal Irish Constabulary: 英国保安部隊) のメンバーがGAAに加入することはできないという方針を打ち出したのだ。RICがナショナリスト運動への監視を厳しくしているという背景があり、GAAがIRBに統治されている事実が社会的に認知されることにもなった。

そのような中で、ティベレアリーではドロモア司教がパリッシュ住民にGAAの活動に参加しないように呼びかけた。クロンハーの司教はパリッシュの聖職者にGAAに対する警戒を強めるように命じた。GAAのパトロンだったクローク大司教でさえ、GAAに心から失望していると証

言した[King, 1984: 10](カッコ内は筆者)。

IRBとは政治的指向の異なるINLと繋がりを持つカウンティも中央委員会に不満を示し、組織から一線を画する形となった。以前からINL色の強かったキルデアでは、中央委員会との対立を表明した。「キルデアのGAAは、前中央委員会の後継者として選挙により選出されたとする現在の自称中央委員会を認めない。理由は、我々が中央委員会の影響を受けないことは不可能であるからである。」[Eoghan, 1984: 12]。

聖職者からのボイコットとINLとの対立といった要素によってGAAは瀕死の状態に陥りつつあったが、これに追い打ちをかけるような出来事が起こった。GAAパトロンの中心的人物のパネル (Parnell) の私生活における不祥事^{注10)}であった。聖職者は、彼をリーダーとして不適切だと弾劾した。GAA中央委員会はパネルを支持したが、多くのGAA関係者は不支持の立場を表した[Ó Corcora, 1987: 45]。このような混迷の下、グラスルーツ・レベルでのGAAへの支持が低下していった。1892年2月の総会では、現クラブ数が200であることが発表された[De Búrca, 1986: 59]。1888年の加盟数が約1000クラブであったのが、翌年には約半数となり、1891年までには200まで落ち込んだのだ。

3) Banの廃止とIRBの影響力低下 (1895-1900年)

1895年にブレイク (Blake) が事務局長に就任すると様相が変わった。政治への関与がGAAを壊滅状態に陥らせたと判断した彼は、政治色の払拭に努めた。イギリス政府の下で働く警察官の加入を認めたことで脱政治色のアピールをした[Blake, n. p. : 1]。同時にブレイクは、ルールを洗練することを徹底させた。ラフプレーの増加によって競技が衰退したとする見解があるため、ボールの規格統一やラインズマン導入といったルール確立に努めた[MacLua, 1967: 32]。

1896年には「外国ゲームに対する禁止令」(Ban)を廃止した。1886年に導入されたBanのルールでは、「GAA以外のルールでフットボール(ラグビーやサッカー)等をした場合はGAA

のメンバーになれない」[O'Sullivan, 1916: 43]ことを規定していた。実際には政治的背景というよりも、ゲーリック・フットボールを他のフットボールと混同させないためのルール制定化が目的だった。しかし、外国スポーツの排除というナショナリスト的要素が感じられることから、Banを廃して、GAAの人気の回復しようとした。さらにIRBの影響力を弱めて、聖職者からの信頼も回復しようとした。努力は実り、1896年にはクラブ加盟数が300を超えた。組織の内紛などによって、IRB自体の影響力も弱まった。

IRBはGAAを活用して国民のナショナリスト的感情を喚起しようとした。しかし絶え間ない抵抗に遭い、結局その使命を果たすことはできなかった。皮肉なことにIRBの影響力が弱まると、GAAには再生の兆しが見えたのである。

こういったグラスルーツの動向は、ナショナリズムの象徴である伝統スポーツが急進派ナショナリスト運動に利用され、GAAは彼らのミッション達成のために存在したとするこれまでの研究では軽視されてきた。この段階ではGAAメンバーは、ナショナリストというよりもむしろパリッシュの一員としてのメンタリティに強くしばられていた。

4) Banの再導入と大きな変化(1900-1910年)

20世紀に入るとGAAに大きな変化が訪れる。当時、各地でロバート・エメットが起こした反イギリス蜂起^{注1)} 100周年記念行事が開かれていたのだが、至るところでGAAの中心的人物がGAAの発展の必要性を強調した[De Búrca, 1980: 86-87]。これに呼応するかのように、GAAでBanの再導入に関する議論が活発化した。組織の中心だったオサリバン(O'Sullivan)のパレードでの演説が議論のきっかけとなった。「我々アイルランド人はここに、国民が英国化されることを阻止するため、いかなる面においてもイギリスの娯楽が我が国に浸透するのに抵抗するのを誓う。(中略)こうしたスポーツ(ラグビーやサッカー)は、外国のマナーや習慣を猿まねするつもりのない真のアイルランド人のためにGAAが提供している国民の娯楽へ重大な悪影響を与えている」

[MacLúa, 1967: 40-41](括弧内は筆者の説明)。

Banは1905年に再導入された。今回は最初に導入されたときの「伝統ゲームの保護」という理由からではなく、様々な面で浸透してきた英国化に対する反発からだった。Banの導入と呼応するかのようにGAAは勢いを取り戻した。GAAの年次総会へのカウンティ代表は1900年には8カウンティだったのだが、1905年には15カウンティ、1909年には24カウンティが代表を送るほど興隆をみた[De Búrca, 1908: 62]。1909年6月までには全32カウンティが中央委員会に登録し、財政危機から脱して黒字の組織になった[De Búrca, 1980: 97]。

Ban再導入とGAA再生の相関関係は一概に判断できないが、「独立」を視野に置いたナショナリスト運動にGAA内部の流れが呼応したとの見方が妥当であろう。パリッシュ成員として地域の娯楽であるGAAゲームに親しんでいた人々が、GAAの活動はアイルランドが英国化に対抗する手段となりうるという認識を強めるきっかけを作ったといえる。マクルーア(MacLúa)によると、Banは「GAAにとって、ナショナリズムのバロメータ」[MacLúa, 1967: 48]であり、その効用は「メンバーをフィルターにかけることができる」[MacLúa, 1967: 48]点にあると述べている。イギリスのスポーツなどの娯楽やその他の生活習慣がアイルランドに浸透することは、ナショナリストとしてのメンタリティを弱体化することでもあった。Banによってその危険が取り除かれ、GAAメンバーの中でナショナリストとしての「層」が先鋭化されたのだ。

中央委員会に全カウンティが登録したことから、メンバーは自分のパリッシュやカウンティの代表というだけでなく、全国的なGAAの一員であるという帰属認識が生まれた。中央委員会を中心として、パリッシュやカウンティを横断した横の相互依存のウェブが広がっていったのだ。「われわれーわれ」バランスの変化に注目したエリアス(Elias)によると、古代から現代に移行するにつれて「われわれ」という認識が多層化したという[Elias, 1991: 202]。運命共同体的に生活してきたパリッシュ住民のメンタリティは、

エリアスが単一層で形成されているとした古代の「われわれ」の概念に近い存在であったと思われる。しかし交通機関の発達に伴ってパリッシュやカウンティ間のGAAゲームなどの交流が頻繁になり、現代的な多層化された「われわれ」概念が形成されてきた。その中で、ナショナリスト運動の興隆とともにパリッシュやカウンティを横断して「われわれ=Irishness」という「層」で結ばれた「われわれ」概念が形成されていった。GAAによるBanの再導入によって、このIrishnessを媒介にした「われわれ」概念が強化されたといえる。

5) ナショナリスト運動の頂点へー

イースター蜂起 (1910年以降)

1905年にはナショナリスト政党のシン・フェーン党^{注12)}が結成された。同じ頃、1893年にアイルランド文化復興を目的として創設されたゲーリック・リーグ^{注13)}が成功を収め、アイルランド国立大学の入学資格必修科目にアイルランド語を加えた[Connolly, 1998: 215]。こうした諸団体の成功がナショナリスト運動を加速させることになった。

週刊紙『ゲーリック・アスリート』はゲーリック・リーグとGAA間の協力を繰り返し提唱した。例えば1916年3月18日号には以下のような記事がある。

「…彼ら(GAAメンバー)を可能な限りゲーリック・リーグに参加させよ。彼らにアイルランドの過去の歴史において重要な時期を勉強する努力をさせよ。そしてこうした活動で得たモラルを現在の状況に活用させよ」(括弧内は筆者の説明)^{注14)}。

同号においてゲーリック・リーグ会長のハイド(Hyde)が連携の強化を促した。例えばハーリングの試合でアイルランド語のみを使用することで、さらなる連携を提唱した。いくつかのGAAクラブではジョイント・イベントを開始し、これが新しい文化的側面を演出することになった。ダブリンのクローク・クラブのクラブ史には、当時の様子が描かれている。

「クラブでは毎週末アイルランド語のクラスが

行われた。アイリッシュ・ダンスが行われることもあった。毎年恒例のケーリー^{注15)}もとても重要なスペシャル・イベントの内の一つであった。(中略)アイルランドで作られた衣服以外を着てくることは許されなかった。クラブはアイルランドの産業復興のパイオニアといっても過言ではないであろう」^{注16)}。

他団体との交流によって新たな局面が生まれた。1900年まではGAAメンバーのほとんどが地方の農業従事者、または都市部では商人、店員、パブ従業員といったいわゆる労働者階級だった。しかし、知識人が中心となったゲーリック・リーグとの交流により、教員、役人、事務員などの非労働者階級の人も参加するようになった[De Búrca: 1980: 80]。前述の通り、GAA創設期にはパリッシュ住民のロール・モデルはパリッシュの神父および地域の司教といった聖職者たちであった。教育を受けた階層の参入により、GAAメンバーの視野が宗教を脱して、多角的に広がったとも考えられる。これによって脱パリッシュ化が進み、ナショナリストとのより強い連携が生まれたと考えられる。

1913年に義勇軍(Volunteers)^{注17)}が形成されると、独立運動がクライマックスに達する。GAAは当初から義勇軍支持を表明し、義勇軍設立会には700名のメンバーがGAAのユニフォームを着て、カマン^{注18)}を背負って参加した^{注19)}。GAA会長は義勇軍への参加を促し、「まっすぐ的を射ることができるように練習せよ」^{注20)}とさえ語った。義勇軍への参加者が多かったことから、土曜日の激しい軍事訓練の後に日曜日のゲームができなくなったとの報告もある^{注21)}。

1916年のイースター(復活祭)の朝、ダブリンに義勇軍兵士約1000名と市民軍約200名が集まり、中央郵便局を占拠してイギリス軍との戦いが始まった。いわゆるイースター蜂起と呼ばれるこの反乱は、結局失敗に終わった。イースター蜂起では多くのGAAメンバーが戦った。クローク・クラブでは「全40名のメンバーのうち、32名がアイルランド自由化のために戦った」^{注22)}と記録されている。キルデアでは、「メイヌース・クラブで重要な働きをしていたブローカー一家

族は(中略)メイヌースとキルクックのGAAクラブのメンバーを多く引き連れて中央郵便局に乗り込んだ。あまり多くを連れて行ったために、その年の選手権にメイヌースは選手不足のため辞退しなくてはならなかった」[Eoghan, 1984: 112]との記録が残っている。

イースター蜂起鎮圧後、イギリス政府はGAA競技の全面禁令を出した[De Búrca, 1980: 131]。しかしGAAのグラスルーツの芽を摘むことはできなかった。GAAは、その後もナショナリスト運動の中心的役割をした。1922年にアイルランド自由国が誕生した後も、ナショナリストの象徴であり続けた。外国スポーツを禁止するBanは1970年まで継続された。しかし、イギリスに移住するアイルランド人が増え、旅行やメディアを通じて相互交流が盛んになったことから、Banの理念は形骸化され、廃止に至った。

3. おわりに

GAAは設立から独立戦争の間に組織の瀕死状態を経験したわけである。原因となったのはIRBが率いる中央委員会と聖職者やINLとの対立であった。多くの先行研究にみられるようにGAAの設立と発展がIRBのみによるものであるのならば、存亡の危機からの短期回復はありえなかったと思われる。創設当初からパリッシュを中心に育ってきたグラスルーツ・レベルでの伝統スポーツを支える基盤に着目してこそ、GAAの歴史の正確な把握が可能である。

ナショナリズムが台頭したのはむしろ組織が再生した20世紀前半からだった。一時は廃止された外国スポーツを禁止するBanが再導入された背景には、英国への抵抗というイデオロギー的エトスが存在した。このBanによって、「われわれ=Irishness」というアイデンティティが形成された。「我々に対するイメージは常に彼らに対するイメージと結びついている。自分のグループに対する感情的に傾倒すればする程、それに属していない他者に対する敵愾心や恐れが強くなる」[Mennell, 1995: 12]というように、「われわれ=Irishness」の意識は、「外部」のものであ

り支配者階級であるイギリス人、イギリス的な文化への強い抵抗として先鋭化されていった。こうしてGAAは独立運動とリンクして、多くのメンバーが武器を手にした。

メネルが「他のグループから突きつけられた実際の危険に直面して、自分のグループに対する感情的傾倒が形成される傾向にある」[Mennell, 1995: 12]としたように、英国化されることに関する切迫観念がなければ、伝統スポーツの復興運動は起こらなかったかもしれない。結果としてGAAは、時代の潮流の中でナショナリズムのシンボリック的存在となり、独立運動の原動力の一つとなっていった。

注

- 1) 歴史家による研究が多数を占める。例えばアイルランド人 Marcus De Búrca による 2 冊の著作、The GAA: A History of the Gaelic Athletic Association と Michael Cusack and the GAA では、GAA 創設の原動力となった Michael Cusack の個人史に焦点が当てられている。またオーストラリア人 W. F. Mandel による The Gaelic Athletic Association & Irish National Politics では、GAA の中央委員会の議事録を詳細に調査しながら史実を研究している。イギリス人の歴史家 Mike Cronin は Sport and Nationalism in Ireland で GAA のみならず、サッカー、ラグビー等競技とアイルランドのナショナリズムの関係を近代史に焦点を当てて北アイルランド問題も扱いながら分析している。
- 2) 1850 年頃結成された急進的なナショナリスト団体。主に非合法的な地下活動に従事していた。後に組織の内紛を経て 1914 年には一部は義勇軍 (Volunteers) に合流していった。
- 3) Shanon Gael GAA Club の 100 周年記念誌 21 ページより抜粋。クラブの歴史を掲載した記念誌はダブリンのアイルランド国立図書館に保存されている。
- 4) Longford GAA County Board の 100 周年記念誌 45 ページより抜粋。
- 5) Naas GAA Club 100 周年記念誌 2 ページより抜粋。

- 6) Ballinamere GAA Club 100周年記念誌5ページより抜粋。
- 7) 同上。
- 8) *Gaelic Athlete*, 1915年6月19日号、アイルランド国立図書館(ダブリン)にマイクロフィルムとして保存。
- 9) *Freeman's Journal*, 1886年11月2日号、アイルランド国立図書館にマイクロフィルムとして保存。
- 10) Mrs. O'Sheaとの長年にわたる不倫関係が明るみに出たことによる。
- 11) エメットは、United Irishmanを結成し、1803年にイギリスのアイルランド統治の中枢部であるダブリン城を占拠しようとしたが失敗し処刑された。
- 12) アイルランド語で「我々自身」を意味する急進的なナショナリスト政党。文化的、経済的独立を目指した。IRA (Irish Republican Army) とメンバーがオーバーラップする時期もあった。現存する政党。
- 13) アイルランド語復興を目的として結成された団体。アイルランド語の講座やアイルランド語を話すイベント等の主催を行った。
- 14) *Gaelic Athlete*, 1916年3月16日号、アイルランド国立図書館にマイクロフィルムとして保存。
- 15) アイルランドの伝統ダンスを生演奏で踊る集まり。
- 16) GAA 50周年記念誌96ページより抜粋。
- 17) 正しくはIrish Volunteersと呼ばれる。ゲーリック・リーグに掲載された論文が基となって各地で結成された準軍事的組織。IRBの多くのメンバーが参加した。
- 18) ハーリングの試合に用いられるスティック。
- 19) *Freeman's Journal*, 1913年11月26日号、アイルランド国立図書館にマイクロフィルムとして保存。
- 20) *Gaelic Athlete*, 1914年1月7日号、アイルランド国立図書館にマイクロフィルムとして保存。
- 21) Sligo GAA Club 100周年記念誌47ページより抜粋。
- 22) GAA 50周年記念誌96ページより抜粋。

文献

* 1 次資料

1) 新聞等定期刊行物

Freeman's Journal

Gaelic Athlete

2) クラブ(協会)発行誌

Ballinamere G.A.A. Club, *Lebhar chomóradh céadbiana Bail na Maove, Balinamere*

G.A.A. centenary Booklet

Coiste Chontae Shilingigh, *Sligo G.A.A. A Centenary History 1884-1984*

Cumann Lúthleas Gael, *a century of service 1884-1984*

GAA Golden Jubilee Supplement, Irish Press

Longford G.A.A. County Board, *COMÓRADH AN CEID, c.L.c.g. chonate longforirt 1887-1987*

Naas GAA Club, *To Spooners Lane and Beyond: Naas GAA 1887-1987*

Shannon G.A.A., *Shanon Gaels. G.A.A. Club, 1884-1984*

* 2 次資料

Blame, R.T., n.p., *How the G.A.A. was Grabbed*, n.p.

Connolly, S.J., ed., 1998, *The Oxford Companion To Irish History*, Oxford University Press

Cronin, M., 1999, *Sport and Nationalism in Ireland- Gaelic Games, Soccer and Irish Identity since 1884*, Four Courts Press

De Búrca, M., 1980, *The History of The Gaelic Athletic Association*, Cumann Lúthcheleas Gael

De Búrca, M., 1989, *Michael Cusack and the G.A.A.*, Anvil Books

Elias, N., 1982, *The Civilising Process, II: State Formation and Civilisation*, Basil Blackwell

Elias, N., 1991, *The Society of Individuals*, Basil Blackwell

Elias, N., 1994, *The Civilizing Process*, Blackwell

Eoghan, C., 1984, *Kildare G.A.A., A Centenary History*, n.p.

Inglis, T., 1998, *Moral Monopoly*, University College Dublin Press

- Mandle, W. F., 1987, *The Gaelic Association & Irish Nationalist Politics*, Gill And Macmillan
- MacLua, Brendan, 1967, *The Stedfast Rule, A History of The G.A.A. Ban*, Press Cuchulainn LTD.
- McNarnnuns, Liam, 1987, *To Spooners Lane and Beyond: Naas GAA 1887-1978*, Naas GAA Club
- Mennell, S., 1995, "C ivilising and Decivilising, Civil Society and Violence", An Inaugural Lecture delivered at University College Dublin
- Ó Corcora, S., 1987, *COMÓRADH AN CHEID, c.l.c.g. chontae longfoirt 1887-1987*, Longford G.A.A. County Board
- O'Sullivan, T. F., 1916, *Story of the G.A.A.*, printed at Middle Abbey Street

Involvement in Sport Activities and the Growth of Nationalistic Sentiment:

A Case Study of Ireland under the British Regime

EBISHIMA, Hitoshi ¹⁾

Abstract

This paper focuses on the process by which the personality layer of nationalist was strengthened through the involvement in the traditional sport (GAA) in Ireland.

The general understanding about Irish nationalism generated through the GAA activities is that the IRB took control from the beginning and the nationalist feeling was reproduced through the GAA activities. The different viewpoint about this is provided in this thesis.

The parish-based club system played a main role in the creation of the cohesiveness among the GAA members. Irish National League was another key player for this role. Catholicism and introductory campaign for home rule were two ideological backgrounds for the establishment of the GAA.

Subsequently the networking between parishes or counties was enhanced through the GAA activities along with the other nationalist movements. The web of interdependency was extended in this process and a rather isolated unit of a parish became more integrated to the nation-wide nationalist movement.

Through this process, the parishioner's layer of nationalist became more dominant than the other layers in their mentality. Finally several nationalist movements became inter-linked with each other and amplified its sentiment towards Independence.

Local club histories were used to illustrate the grass-roots sentiments rather than the decision of the Central Council of the GAA. Consolidated 'single-layered' sentiment, which was facilitated by the Ban, against political and cultural colonization by Britain was a key factor to explain the generation of Irish nationalism within the GAA members.

Key words: Nationalism, Catholicism, GAA, We-I Balance

1) Department of Sport Study, Biwako Seikei Sport College